

時報  
2019.7

# 林惱煩遊

## 盂蘭盆法要

お盆の期間

七月十三日より十六日

八月十三日より十六日

左記のとおりお盆の法要をお勤め致します。万障繰り合わせの上でご参詣下さい。

七月十六日（火）

午後六時より

衆僧総供養読経

法話

右記が一般的なお盆の期間となります。しかし土地によって期間の違いがありますので七月中旬より八月いっぱいまで、ご自宅、お寺でのお盆の読経を承ります。

尚、伺うお家が多いのでご希望のお宅は早めにご連絡ください。

初盆で無地の提灯を飾られた方は法要当日お寺に収めてくださいお焚き上げします

住職

お盆です

昔からお盆には仏となられた亡き人がお浄土から帰って来られると言い伝えられて来ました。お盆の入りの日にはお迎えの灯を焚き、お帰りの日には送り火を焚くという風習もあります。お盆の風習はこの国独自のものです。大昔の人が持っていた死生観と仏教が混じり生まれた行事です。亡き人もう一度会いたい。一緒に笑ったり、泣いたりしたい、今のあなたがどうしているか知りたい、今の私がどうしているか知ってほしい。あの掛けがえない時をもう一度、そんな亡き人に掛ける強い情いから産まれた行事です。

さて、みなさんは今、仏となられた亡き人の顔が思い

浮かびましたか。それは、どんなお顔ですか？

笑っている顔、怒っている顔、泣いている顔、寝ている顔、それぞれの顔にそれぞれのシーンがありましたね。その一つ一つが全部あなたに向けられています。その一つ一つがあなたを作り上げている大事なものです。そしてあなたを見守り働きかけてくれています。先ほども思いうそうと思わなくても自然とお顔が浮かびましたよね。それが仏となられた今もあなたと一緒にいるあかしです。七月十六日午後6時より盂蘭盆法要をお勤めします。夏の夜のひと時、亡き人と向かい合い私ひとりを見守ってくれているほとけさまに手を合わせましょう。

## 自己紹介

自己紹介が嫌いです。

何を紹介していいのかも分かりません。

わたしはわたしのなのですが、そのわたしが何者かがまったくもってわからないのです。

日本国に届け出された名前は江口智流です。

真宗大谷派に届け出された名前（法名）は釈智流です。

順正寺の副住職です。次男です。末っ子です。

性別は男です。年齢は56歳です。職業は僧侶です。

日本に国籍があります。東京都民です。練馬区民です。

B型のふたご座です。未婚です。

だから？

法名がなかった時も、二十歳のときも、役者をしていたときも、京都・埼玉に住んでいたときも、わたしはわたしであったし、そうした社会的ななんやかんやは、わたしではなく、わたしにくつついている言い訳ではないのです。無駄ではありませんが、わたしそのものではないのです。

社会的に何かをしなければならぬ。その社会の何処に属するかで決まる。社会的価値観で自らの存在意義が測られる。そんな幻想に惑わされていませんか？

そんなものはないのです。それがわたしではないのです。

社会的、と定義づける「社会」は、自分が勝手に決めつけている価値観でしかなく、自分のいるカテゴリー内の価値観でしかないのでしょうか。とてもあやふやな。

しかし、現実、わたしはその「私が勝手に描いている社

会」の「わたしの価値観」でものを測り、良し悪しをつけています。で、それに相反するものは「悪」とみなします。その結果、「悪」があまりにも多くて、腹立たしく生き、息苦しさを感じているのです、今現在も。

だから、あまり苛立ちたくないから、必要最小限の付き合い以外、わたしはしなないでいます。そうなるといよいよ自分の測りに、思い込みに閉じこもり、閉鎖的、偏向的になつていくのです。悪循環極まりない、です。

根が出不精なわたしは、自分と考え方が同じような人と会うことも面倒くさいのです。そうになると、仕事や、たまたまや、何かの会議や、たまに飲みに出たときに臨席になったときや、そんなタイミングで人と会い、間を測りながら話すので、腹は割れないにしろ、合う人がいろいろな人であることが何よりなんです。気が合わないのだけれど話は合う人、思考方向は似ているのに好きになれない人、いろいろです。そんなんだから、気が合う、社会性が似ている人ばかりに囲まれていくわけではないから、嫌でも意に反する、イラつく、納得できない意見も聞けます。面倒くさいので聞き流して対話をサボりがちなのは良くないなど最近では反省まではしています。「対話をする」を実行はできていません。

でも、会おうとしないくせに、自己紹介をしないくせに、認めてもらいた気持ちでいっぱいなんです。自己紹介が得意なくらいだから、自己存在に対しての証明が、いわゆる自信でやつが全く無いのでしょうか。であるから、だれかに「わたし」を「証明」してもらいたくてしようがない

のでしよう。だから、何かとやってみたりするんです。やって、褒められたとしても、自己証明はまったくできず、そんなところで一瞬でも悦に入っている自分が垣間見え、恥ずかしさを抱え込んでしまうのです。

自分の存在を社会性や仕事や人間関係にしか見いだせないとする、社会に順応できなかつたり、仕事ができなくなつたり、友人がいらないで、家族がいらないで、自己否定に走るしかありません。

社会・仕事・友人・家族がわたしなのではないのです。でも、「わたし」が「わたし」なわけでもないらしいです。これはお釈迦様が仰っておられます。だからややこしいのです。わからないのです。問い続けることが大事です。答えはありません。答えをだすことではなく、「問い」を探すことがいじなのです。

わたしは矢沢永吉がずっと好きなんです。でも、好きな歌は？と、問われると、その都度、状況によって変わるのですが、一番多く思い浮かぶのは吉田拓郎の「今日までそして明日から」という曲です。その一節から。

私には私の生き方がある

それは おそらく自分というものを

知るところから 始まるものでしょう

けれど それにしたって

どこで どう変わってしまうか

そうです わからなまま生きて行く

明日からの そんな私です

ま、自分自身に自己紹介をするようなつもりで生きていくのもありかな、この文章を書いていてそんなことも思い浮かびました。そんなわたしです。 副住職

追記 最近やたらと、またまた「引きこもり」「引きこもり」とマスコミが中心になって、それに乗っかって社会で騒いでいますが、「引きこもり」≡「悪」という、くだらない偏狭的なレッテル貼りに苛ついています。【「ひきこもり」だから犯罪を犯した。みなさんは違うから安心してくださーい】とでも言いたいのか。あるカテゴリーに属しているから悪、という思考は、まったくもってナンセンスです。どこのカテゴリーに属してしようと、どれだけ清く正しくであろうとしても、縁が整えば誰であろう「殺人者となりうる」、そんな「わたし」であるのです。

わがこころのよくて、ころさぬにはあらず。また害せじとおもうとも、百人千人をころすこともあるべし（中略）さるべき業縁のもよおせば、いかなるふるまいもすべし。

親鸞聖人（『歎異抄』第十三章より）

社会で、「おや？」と疑問になった事件事故の加害者は、わたしの鏡でもあるのです。

「ああ、どこそこに属しているから（出身地や職業や信仰）そういうことをするんだ」という考えや、「あいつはあの犯人と同じカテゴリーだ」という偏見を持ったときに、そうした自分を恥じる事ができるか否か、それが大事です。他人事で生きるか、大事に生きるか、です。合掌

それから三日は外に出られなかった四日目  
何とか伯父の目をごまかし下女の目を盗んで  
芋を2つ懐に忍ばせねずみのもとに走る

いつもの寺の軒下にはいなかった、橋の下  
へ走る、そこにもいない、嫌な予感がする  
あたりを見回す、見回す、見回す。

改めて気が付くが河原は投げ捨てられた死骸  
で埋め尽くされている。胸が痛い、心臓が張  
り裂けそうだ

居た

見慣れた足だ、小さな足だ。河原の葦と死体  
の山に隠れて顔は見えないがねずみの足だ。

「ねずみ。ごめん。何もできなくて。ごめ  
んな。さびしかったよな、心細かったよな、  
苦しかったよな、怖かったよな。ごめんよ。  
ごめんよ。ごめんよ。」

残ったものは詫びるしかない。泣くしかない。  
しばらく泣きじゃくりふと人の気配を感じ顔  
を上げると僧形の者が遺骸に屈みこみ何かし  
ている

「坊さん、なにしてる」

「うむ。哀れでな。こう死人が多くては供養  
も満足にしてやれない。せめて、みほとけへ  
の橋渡しができないかと思つてな」

養和元年（一一八一年）大飢饉があつた。こ  
の時、松若丸（親鸞）九才である。

方丈記には都で四二三〇〇人の死者があつた  
と書かれている。当時の京都の人口が十万人  
から十二万といわれるからおよそ四〇パーセン  
トの人が死んだ。死者の供養が間にあわず仁  
和寺の僧が遺骸の額に「阿」の字を書いて供  
養の代わりとしたと言われている。

「それがみほとけへの橋渡しになるのか」  
松若は納得がいかない。

「わからん」

「わからんて、わからないのにしているのか」

「こんなことしか出来ないのだ。未だ修行の  
身であるわしにはこれぐらいしか出来ないの  
だ。こんな哀れな生き死にを二度と繰り返さ  
ないようせめてみほとけに祈るのだ」

「祈ればたすけてくれるのか」

「みほとけのお慈悲は限りがない。きつと次  
に生まれる時はもつとましな命を送れるよう

にして下さる。」

「坊さんになれば、みほとけに頼めるのか」

「ああ、そうだな」

苛酷な現実である。一切の慰めも、現世利益  
も拒絶する苛烈さは九才の子供にも本質を問  
わせる。

「なあ、坊さん。俺たちは何をしているんだ。  
俺たちは苦しむために生れてきたのか。」

こいつは俺の友達だ。いちばんの友達だ。死  
ぬのが怖くて怖くて、腹が減って減って、そ  
のまま死んだ。こんなのひどい。なあ、  
教えてくれどうすればこんなひどい目に遇わ  
ずに済む。どうすれば、もつと、もつと……」

「わっば、つらいな、悲しいな。わしもまだ  
わからん。すまん。でも必ずみほとけの救  
いはある。みほとけのお慈悲は必ずある。そ  
れがわかれば。だから、わしは坊主でいる」

次号に続く予定

高校時代からの友人T君（神護かずみ）が江戸川乱歩賞を受賞した。勤め人やりながら会社にはれないよう作家活動していた。昨年早期退職をして還暦までは作家に専念すると言っていた。それまでに芽が出なかつたらまた考えると。なんて偉い奴だ。

そのT君は趣味が怪獣フィギュアを造ること。特にゴジラだ。一口にゴジラと言っても映画ごとに違うらしくその映画のそのシーンのゴジラと細部の細部までこだわって造形し塗装するらしい。私も最近粘土をこねくり回し仏像を作ろうとしている。久しぶりにお寺に来てくれたT君にどうやって造形するのか教えてもらった。

「要はな、カンセイ、何回も何回も失敗を重ねて細かいところまで納得が行くまで削ったり足したりして造るのだ」さすがに小説で賞を獲得する先生だ。言葉に重みまで出てきやがった。

でも、なんだよ、こう一発でできないもんかね。スカツとよく書いているが「継続は力なり」って天敵な言葉なんだよな。

住職

住職からのお願い

今東京では火葬場が不足しています。皆さんご経験のとおり通夜葬儀の日程はお寺の都合より火葬場の都合が優先されてしまいます。そ

の為ご法事の時間のお約束を頂いていても変更をお願いすることがあります。葬儀をお勤めすることはそのお家の方にとって一生の一大事です。そこは相身互い、どうかご寛恕下さいますようお願い致します

定例行事 いずれもご自由にご参加下さい

開法会 毎月2日夜7時から、「御文」のお話、座談会をやっています（1月、8月はお休み）

歎異抄を読み聞く会「微妙音」 毎月5日午後2時

8月はお休みします

又、9月は4日（火）午後2時です。

白色白光の会（婦人会） 毎月第2木曜午後1時

お経（正信偈）の練習と法話と茶話会

「照久会」浄土真宗初めて講座 二月、四月、六月、十月、

十二月の第2土曜午後2時より5時まで（参加費 2千円、

照久会会員は千円）講師 聞成寺住職 佐竹貫裕師

仏像なぞり書き「仏像描くぞう」

第2水曜午後6時と月の最終日曜日午後3時から

参加費三百円（初回のみ別途テキスト代千円）